

History 浜離宮

徳川将軍家の庭園

中央区浜離宮庭園一の、最寄の駅は、ゆりかもめ、都営大江戸線「汐留」駅下車。都会のオアシスとして都民および観光客の散策スポットとして親しまれており、水上バスが発着するなどアクセスも良い。

海水を引き入れた潮入りの池と、二つの鴨場をもち、江戸城の「出城」として、徳川将軍家の庭園だったが、明治維新ののちは皇室の離宮となり、昭和二十年（1945）東京都に下賜された。関東大震災で損傷した建物、樹木の整備ののち公開され、昭和二十七年（1952）国の特別名称および史跡に指定された。

潮入の池とは、海水を導き、潮の満ち干によって池の趣を変えるもので、海辺の庭園で用いられてきた様式で、かつては旧芝離宮恩賜庭園、清澄庭園、旧安田庭園なども潮入の池だったが、実際

に海水が入り出すのは、ここだけになった。

寛永年間（1624-1644）までは、将軍家の鷹狩場で、一面アシが生い繁っていた。初めて屋敷を建てたのは、四代将軍家綱の弟、甲府宰相の松平綱重で、承応三年（1654）、将軍から海を埋め立てて別邸を建てる許しを得た。甲府浜屋敷または海手屋敷と呼ばれ、その後、綱重の子供の綱豊（家宣）が六代将軍になったのを機に、将軍家の別邸となり、名称も浜御殿と改められた。

以来、歴代将軍によって幾度かの造園、改修が行なわれ、十一代将軍家斉のときにほぼ現在の姿の庭園が完成した。

浜離宮は、潮入りの池や鴨場を中心にした南庭と、明治時代以降に造られた北庭とに大別されるが、「お伝い橋」のかかる潮入りの池や鴨場等には、いまなお往時の面影を残していて、江戸時代に発達した大名庭園を代表する貴重な文化財となっている。

庭園の主な植物として、クロマツ、タ

ブノキ、トウカエデ、サトザクラ、サルスベリ、モミジ、ケヤキ、エノキ、ハゼノキ、ウメ、ツバキ、ボタン、ハナシロウブ、アジサイ、サツキ、ヒガンバナで、約六千本、特に黒松の美しさが目立つ。大手門橋を渡つてすぐ、三百年の松が、太い枝を低く張り出し、いまなお堂々たる姿を見ている。いまから約三百年前、六代将軍家宣が、庭園を改修したとき、記念に植えた松と伝えられている。

東京湾に面した水門近くの山、「新樋の口山」は、湾内を一望できる絶景のポイントを提供している。また「中島の御茶屋」は宝永四年（1707）に建て造られ、将軍たちは、庭園の眺望を堪能し休憩所で、現在の建物は、昭和五十八年に復元されたもの。

潮入りの池の岸から、この茶屋を挟んで、「小の字島」とをつなぐ「お伝い橋」は、延長百十八米もの総檜造りの橋で、平成九年（1997）に架け替えられた。周囲の黒松を配して、東京タワーをはじめ、そり立つ高層ビルの眺めは、江戸時代と同居したまさに現代の景観となっている。



築地川に沿った大手門橋(浜離宮の出入口)



三百年の松



潮入りの池 横堀



将軍お上り場付近で



樋の口山



大名庭園

旧芝離宮園賜庭園